
The Last Battle

八剣太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Last Battle

【NZード】
N O 2 6 9 E

【作者名】

八剣太郎

【あらすじ】

2050年TOKYO。>吸血鬼狩りくを生業とするヴァンパイアのミレンダーは、元朝倉の残党組織>狂宴くへ決着をつけるため、戦いへ赴く。【シャドウランTRPG第一版（！）ルールを元にした小話です】

「……ひとりで来たのか？まあ、私が用があるのはお前だけだから好都合だが、ミレンダー」

ざわざわと吹き上げた風が、男のあまりにも元壁すぎる銀の髪と黒いコートをたなびかせた。

かつての全日本自由労働者連合会、今は「狂宴」と名乗るテロ組織の幹部、「闇」の使い、ルウェイード。彼もまた自分と同じく、朝倉の元研究員であり、H M V Vウイルスの感染者だった。H M V Vウイルスは、感染者に肉体の不老と再生能力をもたらすが、自ら生存に必要なエネルギーを作り出せないため、常に何らかの形で人の精力の摄取が必要となる。故に、感染者は、「人」ではなく、「ヴァンパイア」と呼ばれるクリッターへ分類された。

年上に見えるルウェイードは、本来なら自分より年下だ。「東京紛争」後、朝倉が開発したものをさらに改良したウイルスに自ら望んで感染した、という。自分は不自然なあどけなさの残る姿で止まつてしまつたが、対してルウェイードは人間として一番力溢れる時期を意図的に止めたのだ。その隙のない力満ちた優美な姿は、どれだけ魅力的に人の目に映るのだろう。「狂宴」の4人の幹部の内、最も多くの人々を破滅させたのがこの男であることは、間違いない。

ミレンダーはペリー・ピストルを抜いて、ルウェイードに向かって。「お前には……これ以上、僕の何ものにも触らせはしない、ルウェイード」

ミレンダーは間髪を入れずに引き金を引き、弾丸は真っ直ぐに男の頬を抉った。しかし、鮮血を飛ばしながら男は微笑んだ。

「拳銃か？無粋じやないか、お前と私の仲なんだ」、ルウェイードの顔はすぐに元の通り、傷がふさがり肉が戻った。「もつと相応しい遊び方があるだろ？！」

マナの奔流が敵意あるものとして、矢のように放たれる。ミレン

ダーは咄嗟に両腕で口を庇つた。激しいエネルギーがぶつかり合い、消滅する。

「……そうだ、お前のおもちゃはそのゝ霧くだつたな」

ミレンダーに人工的に与えられたH M V Vウイルスは、マナを操る呪文は与えなかつたが、一方で精靈を使役する力だけは残された。「私達に似合いのおもちゃじやないか、うん？ クライストはゝ光くを操るが、私が操るのはゝ闇く。お前のゝ霧くはゝ闇くにこそ親しく、似つかわしい。そうは思わないか？」

ルウェイードの側に、漆黒の塊が実体化した。

「僕はお前に支配されるつもりはない！」

「支配？ 違うよ、ミレンダー。一体化、といつた方が相応しいだろうか。私達はひとつになるのだ、お前と私で共に歩むのだよ。この地は、私達のものとなる、私達にはその王となる力がある」

ことさら強調された人称に、ミレンダーは苛々した。

「お前と僕は違う」

「いつまで我儘を言つつもりだ、ミレンダー。眞実に抗つたところで何が変わるわけでもない。お前と私はこの世で唯一同じものなのだ、いい加減に認めるがいい」

「我儘を言つているのはお前の方だ！ 『俺』は、お前がそうなる何年も前にオリジナルのウイルスに感染して唯一生き残つた『オリジナル』なんだよ！ お前のような格下の劣化コピーとは訛が違う」

「…………ほほ」

ルウェイードは目を細めた。「面白いことを言つようになつたな」

「…………僕は、お前を、僕の存在全てをかけて倒さなくてはいけないんだ」

「何故そんな哀しい」と言つ？ 私達が解り合えば、全てはうまくいく。渕も朝倉も関係はない、力ないただの人間達からこの街を取り上げ、私達が生きるに相応しいものに変えてゆくことができるのだ、それこそが私達が望んだ未来だろう？ 何も難しいことなどない、それなのにお前は戦うことを探むのか？ 血生臭い未来を」

ミレンダーの背後にあつた霧の精靈はゆらりと立ち上がり、ミレンダーを守るように側に動いた。

「確かに『僕達』は異端だ。けれど、僕の世界はここにある。たとえ、お前と作った世界が、美しいものであつても、僕はその世界を愛せない。僕が必要とするものは、全て、ここにあるんだ！」

霧の精靈は、ルウェイードの使役する闇の精靈へと躍りかかった。漆黒の中へ霧が混ざる。ミレンダーは再びアレス・プレデーターを闇の精靈の方に向けて、引き金を引いた。魔法の力は、意志のないものを受け入れない。精靈に弾丸ではダメージを与えることは分かつていただ、自分と同じヴァンパイアを相手にして弾を無駄に消費するより、まずは頭数を減らす方が先だ。黒い塊が僅かに削れる。

ルウェイードは薄い笑みを貼り付けたままだ。

「無駄だよ、ミレンダー」

ゆつくりと、子どもに言い聞かせるような調子でミレンダーは思わず歯を噛み合わせた。

「我が力よ、集え！ > 理力破く！」
パワー・ボルト

ルウェイードの生み出す完全な理論は、物理的な力としてマナを構成し、霧の精靈へ叩き込まれた。霧の精靈の体が削れ、闇に散る。殴り合いに徹してもこのままで押し切られる。

ミレンダーは素早く精靈に命令を下した。精靈は闇の精靈を離して、ルウェイードに絡みつく。精靈の力によって、ルウェイードの行動と反応を鈍らせるのが狙いだ。

「何！？」

ミレンダーはそのまま軽く後ろに飛び退き、ルウェイードの背後のエレベーターに向けて手榴弾を放つた。

狙い通りの位置に落ちた手榴弾は、次の瞬間に爆発した。目を閉じ、耳をふさぐが、尚重い音が短い間聴力を奪う。ばらばらと壁が崩れる音が続いた。爆発と壁の破壊の衝撃に挟まれれば、無事ではすまない。少なくとも、普通の生物ならば。

どれほどのダメージを『えられたか。

たとえば、脊髄を粉々に碎かれ、脳髄を刻まれたら、いくらゝ再生く能力が高いとはいえカバーしきれず死に至る。だが、元々身体能力の高いヴァンパイアは、まず、そんな状況には陥らない。

ミレンダーは、すぐに回復した視力で爆発後の様子をうかがつた。煙の中に男は再び現れた。しかし、高級ブランドのスーツは千切れ、髪はべったりと塗れ、腹は裂けていた。右腕は肘よりほぼ一枚で繋がつて垂れ下がり、足を妙な方向へ引き摺つている、が、ルウェイードは、死んではいなかつた。しかも、この一見致命的な肉体の損傷は、ルウェイードが一步踏み出す度に、驚異的な速度で元に戻つていく。元に戻らぬのは、汚れきつて乱れた髪の毛と破れた服だけで、その不均衡さが余計に不気味だ。

ミレンダーは思わず後ろに下がつた。

「……お前は相変わらず、やんちゃが過ぎる子だねえ」

「……お前、は」

ルウェイードは顔を歪めて笑つた。紳士然とした振る舞いはどうに消えて、狂氣すらかいま見える。ミレンダーは初めて恐怖を覚えた。「役に立たないおもちゃだ」

ルウェイードとゆつくりとミレンダーに歩み寄りながら、僅かに残つた霧の精靈を握り潰した。

「そう、確かにお前はオリジナルだ。立場から言えば、お前は私の親であり、偉大な先駆者でもある。ただね、」

闇の精靈が突如、ミレンダーへ襲いかかつた。抵抗を試みるが、恐怖に萎えた意志では満足にいかない。よろめいたところを、絡みつかれた。元素精靈は一度犠牲者を捕らえると、自分の物質へ取り込もうとする性質がある。ミレンダーの今の状態では、絡みついた精靈を叩き飛ばすことは無理だった。

「……！」

闇に視界を遮られ、緩やかに、だが、逃れられぬ力で首を絞め上げられる。

「……ルウェイー……ド」

「それはすなわち、古くさい、時代遅れの產物、というわけだ。要するに、戦車とミサイルを相手にしていればよかつたのだよ、お前は。だが、今はそうはいかない。人間が人間の限界を超えて既に20年以上、今こそ、生物を越えなければ、支配者にはなれないのだ」組織に属する一個人がそれほど狂っているわけではなかつたはずだつた。だが、組織として 世界を入れた大企業としての地位を得た時、全てが狂つてしまつた。今となつては、何故あの忌まわしき東京紛争が勃発したのか、誰も正確には分からぬ。大企業の利権争いが、市民を含めた大勢の犠牲と、東京の破壊を招く戦争にまで発展したのか、誰も分からぬのだ。そして何故、朝倉の、何の地位もなかつた若い社員である自分が「兵器」として、ウイルスに感染させられたのかも、分からぬ。

これだけの犠牲を払つてもまだ、あらゆる組織は未だに抗争を繰り広げている。紛争時と違うのは、抗争が地下に潜る傾向になつたというだけだ。

それは本当に人々が望むことなのか？

東京を支配できたとして、何が満たされるのだろう。人々ゝ狂宴くは、東京紛争以後、大企業の犠牲になつた労働者達の集まりだつた。それが、今、かつての東京紛争を繰り返し、かつての朝倉と渕のように、己の支配圏を拡充しようとしている。人を食い潰して人を越えることが、人の望みを叶えることになるのだと、思えない。事実がたとえそうとしても、そんなことは信じられない。

「……お前は……間違つてゐる」

「力を失つたものの戯れ言など通用しないよ、ミレンダー。お前の力は半端過ぎる。精霊は使役できるが、呪文は使えない。銃は撃てるが、身体は脆い。だが、完全な私と共に歩めば道は開ける。さあ、改めてお前の答えを聞こう」

「……クソ食らえ」

ルウェイードは、大仰に溜息をついて、首を振つた。そして捕られ

られて動けぬミレンダーの側に近寄り、その下顎を持ち上げた。ミレンダーは次の行動に予測がついたので、思わず唇を噛み締める。

「……聞き分けがないのなら、仕方あるまい。私の力となれ！」

「……」

鈍い音ともに重い痛みが首筋に走った。噛みつかれ、自分の精力を吸収される。同じヴァンパイア同士、人間相手の面倒な手順は必要ない。人間がヴァンパイアを殺すことは難しいが、「同族同士」なら簡単だ、より強い者しか生き延びられない捷は同じだからだ。精力を全て奪われ、エネルギーが枯渇すれば、どれほど再生く能力が高かろうと普通の人間と同じように命はない。

「う……っ

冷たかつた身体が急激に熱を持つ。爪先から力が抜けるのと同時に、駆け上がった快楽が思考を痺れさせる。ルウェイードを剥がそうと、その背中に爪を立てるが、力が入らないので何の意味もない。生理的な反応で目が潤む。このまま死ぬのかという絶望すら、快樂だった。

「ミレンダー！」

叫び声とともに聞こえた銃声が思考を呼び戻した。次の瞬間、被弾したルウェイードの身体が跳ねて、血が降りかかる。ミレンダーは大きく息を吸い、渾身の力を込めてルウェイードを膝で蹴り上げた。そして闇の精霊の束縛を、引き剥がす。

「ミレンダー！ 大丈夫か！」

先程の爆発で大きく空いたエレベーターの昇降路から飛び出た長身の男は、そのままミレンダーに駆け寄った。

「フエードさん」

ミレンダーはよろめいて膝をついた。

「……間に合つたか」

「はい」

ほぼ力は奪われたが、ぎりぎり枯渴はしなかつたらしい。差し伸

べられた手を取つてミレンダーは立ち上がり、ぎこちなく微笑んだ。

「酷い有様だな」

「すみません、結局巻き込むような形に」

「お互い様だ」

フェードは僅かな空中のきらめきを見上げた。「随分役に立つたぞ、このゝ霧くは」

元々フェードとは同じチームという訳ではなかつた。そもそもミレンダーは、凶悪化したヴァンパイア「鬼」と呼ばれるを始末するゝ賞金稼ぎであり、自分と敵の特殊性から、絶対に他人とチームを組むことはなかつた。ある仕事がきっかけで、フェードのチームと出会い、そして彼らも、またゝ狂宴くに対して縁があつた、というだけに過ぎない。朝倉という亡靈に決着をつける、それは自分の仕事であり、最優先すべきことだつた。しかし、ルウェイドを始末するにあたつて、フェードに声をかけたのは、彼の助力を期待すると共に、彼の仕事に対する助力の意味もあつた。それは恐らく、仲間と呼んでいい関係なのだろう。

それぞれの仕事の為に途中で別れたとはいえ、同じ建物にいるのは当然分かつてゐる。爆発があれば、或いは助けに来てくれるかもしれない、と考えたのは甘えだつたかもしれないな、とミレンダーは苦笑した。もつとも、彼に霧の精靈をつけておいたのは、純粹に助けるためで、「貸した」つもりではなかつた。甘いという意味では、確かにお互い様だ。

ミレンダーは、フェードにつけた霧の精靈に、命令を下して、ルウェイドの闇の精靈を攻撃させた。既に先程の戦いで大分削れた闇の精靈は、すぐに取り込まれて四散した。

しかし、ゆらり、とその男は立ち上がつた。おびただしい流血によつて既に血に塗れていない箇所などない。髪は逆立ち、目は真つ赤に染まっていた。ルウェイドは低い声で笑い始めた。豊富な戦闘経験を持つフェードですら、その様子に思わず目を見張る。

「フェードさん、彼は僕の力の分、強力になつています」

「……加えてお前と同じ『不死』か。夕飯までに帰れると思つか？」「正確には『不死』ではありません。ダメージが蓄積すれば、死ぬ可能性があります」

「……確率論で戦闘はできない」

フェードはサブマシンガンを放り投げて、懐から一振りの短刀を取り出した。火器で戦うこのボディガードにはおおよそ似合わない、銀細工の施された古めかしい短刀だった。

「貸してやる」

ミレンダーが首をかしげて両手で受け取ると、その瞬間に短刀は柔らかな光を放った。

「これは……！」

「俺は昔、部族で育った。それはその時の名残だ。俺は使えないが、お前なら使えるだろ？？」

→武器収束具。マナの力を取り込む武器であり、魔力を持つ者が使用すれば、莫大な威力を發揮する。そして、その力は、→再生くすり凌駕する。

「但し、見て分かる通り短刀だ。近づかなければ話にならない。俺ができる限りあの化け物を引きつけるから、後はお前でケリをつけろよ」

「ありがとうございます、フェードさん」

「礼を言うのは早すぎるぞ」

フェードはグレネード・ランチャーをマウントしたアサルト・ライフルを構えた。間髪を入れずに引き金を引いてグレネードを発射する。爆破位置は正確だったが、ルウェイードは倒れない。

「……私は倒せんぞ！」

肉片を散らしながら立ち上がったルウェイードは、低い声で笑った。「人間など食われるべき家畜ではないか。身の程を知るがいい。滅びろ！」→魔力破く！

凄まじいマナの塊がフェードに向かつて放たれる。理力系の魔法とは異なり、精神力に耐性が無ければとても無傷ではいられない。

「へ、霧くよ、壁に！」

霧の精靈は一人を守護するように形を変え、魔法への障壁となつたが、それでも消滅させるまでには至らなかつた。

フードは舌打ちをして、裂けた額からの血を拭つた。「お前の餌になつた覚えはないぜ！」

フードは再度グレネードを発射した。爆風が収まる前に、すぐにアサルト・ライフルをフルオートで連射する。いくらへ再生く能力が高くとも、回復までの時間は僅かでも必要だ。並の生物ではあれば千切れ飛ぶ程の攻撃によるダメージの蓄積は、いくらルウェードとはいえ、元のように動けるまでには時間が要る。

これはまたとない機会だつた。ミレンダーは身をかがめ、人間には有り得ない速さでルウェードに走つた。ルウェードは右腕と右肩を吹き飛ばされていた状態だつたが、近づいてきたミレンダーを見て顔を歪めた。

「何度やっても無駄だ！」

ルウェードが、ミレンダーの肩を恐ろしい力で掴み、再度噛みつけたとした瞬間、ミレンダーは左手に持つていた短刀をそのまま突きだした。ルウェードがぐぐもつた声を上げ、己の腹に刺さつた短刀を見やる。

「……まさ……か、お前に」

「もう、お前の影には怯えない」

ルウェードはふらふらと後方によろめきながら、しかし顔を上げて再度笑つた。

「馬鹿なことを！　お前も我々と変わらぬ化物。私はお前と唯一同じ物だつたのに！　お前には最早どこにも行くべき道がないぞ！　お前の『望む』この世界に、お前の存在できる場所などない！」

その言葉に硬直したミレンダーに、ルウェードが襲いかかろうとする。

「黙つてろ！」

フードは、叫んでライフルを連射した。

「私を殺すな、ミレンダー。私を殺せば、お前は永遠に世界から疎外されるぞ」

倒れたルウェイードは、ミレンダーに手を伸ばした。思わずミレンダーも右手を差し出す。

「ミレンダー！」

ルウェイードが立ち上がりながらその手を掴もうとした瞬間、ミレンダーは左手でアレス・プレデターをホールスターから引き抜いた。過去の全てに決別し、犯した罪を背負う。そんなことは、最初から決めていたではないか。今さらもう迷わない。

「……クソ食らえ」

乾いたピストルの音が、破壊されたホールに響き、ルウェイードは後方に吹き飛ばされた。流れた血は既に血ではなく、崩れた肉体とともに、さらさらと灰へ変わつて消えた。

「……」
「いつに無性にタバコが欲しくなるな」

フードとミレンダーはホールの壁にもたれて腰を降ろしていた。「申し訳ないですが、僕は持つていませんよ。吸えませんもの」

「分かつて。俺も禁煙中だ」

ミレンダーは弱々しく笑つた。ダメージは癒えているが、あまりに一度に精力を失い過ぎた。あと僅かでも失えば狂氣のうちに命を落としてしまう。何よりその為の飢えが酷い。手当たり次第に襲つて、相手が死ぬまで吸収しきくすといつ衝動に駆られそうだ。

「……ミレンダー」

隣にいる友人ですらその例外ではない。彼はサイバーウェアを精神的限界まで埋め込んでいるから、もし、何か間違いが起きてヴァンパイアに吸収されるようなことがあつたら、即死してしまう。ミレンダーは膝を立てて顔を伏せ、自分の腕に爪を立てた。

「辛そうだな」

「……目眩がします」

ミレンダーは息を吐いた。「ルワイードは僕の唯一の理解者だつた」

「……俺には唯の利己主義な化物にしか見えなかつたが」

「……後悔はしていません。全て自分が選んできたことです、でも

……疲れました」

「俺も自分一人で生きていると思っていた。お前の言つてることは正しいよ、ミレンダー。だが、俺には、友人もいれば、まだ、守りたいものもある。一人で生きられると自惚れていたが、彼らに肩を支えて貰つて初めて、自分の存在を認められたことに気がついた。……たまには頼れよ、その為に俺はいる」

珍しく饒舌なフェードに、ミレンダーは頷いた。「ありがとうございます、フェードさん」

「あんな化物風情より、俺たちの方がお前の理解者になれるぞ。ヒューマンとクリッターにどれだけの違いがあるつていうんだ？ 人間同士だって理解できない奴はいる」

不思議と、その言葉が偽善だとは思わなかつた。文字通り人間の最先端を行くこの男も、別の側面から見れば随分異端なのだ。まつとうな人間ができるない影の仕事に就く者である以上、常に社会から絶妙なバランスで疎外される。その中で彼らが「優しい」のは、弱さでなく強さだとミレンダーは思う。

「僕もフェードさんの役に立てたら嬉しいです」

ミレンダーは再度、礼の言葉を言おうとしたが、あることに気がついて言葉を切つた。常人ではない自分には、別の危険が迫つている事が分かつたのだ。ミレンダーは思わず立ち上がつた。

「ミレンダー？」

戦闘用ドローン、その数は10では足りず、100はない。だがドローンだけでなく、生物の匂いもする。>狂宴^{くわうえん}が作り上げた、人間以上の能力の生物であることは間違いない。ルワイードの部下の残党か、或いは、残る^く代表者^{しやくしゃ}の手のものか。

「フェードさん、新手が階下にいます。こちらへ向かつている」

フュードもまた気がついたのか、サブマシンガンを拾い上げて立ち上がった。「退屈しない数じゃないか」

だが、その言葉にミレンダーは首を振った。

「戦闘用ドローンだ、多分、目標にたどり着くまで追い続ける。ここで一人で戦つたらいつまでも先に行けません。フュードさん、あなたは先に行つてください、僕が相手をします！」

「……冷静に考えよう」「う

フュードは抑えた調子で言った。「お前にそれだけの体力が残っているのか？ 残つたお前が死んだら、先に行つたところで意味はないぜ」

「僕の体力は休めば回復するようなものではありません。機会さえあればいくらでも強くなれます。僕は元々、一人で多数を相手にするために造られたものです、今なら丁度よく食えているから、無茶もできます」

「……分かった。ただ、お前は『兵器』である必要はないんだ、それは忘れないでくれ」

ミレンダーはにっこり笑った。「僕はもう、自分の為にしか戦つていません」

「上等だ」

フュードも笑つて頷いた。「じゃあ俺は一足先に、『頭』に對面してくるか」

「フュードさん、これ」

ミレンダーが手渡そうとした短刀を見て、フュードは首を振った。

「それはお前が持つていてくれ。どうせ俺には使えない物だしな。その代わり、後で返せよ」

「……分かりました、遠慮無くお借りします」

フュードは頷いてから、ミレンダーに手を出した。ミレンダーは一瞬戸惑つたが、差し出された手を握った。握りかえされた力は、決して、生身の人間のような柔らかさはなかつたが、十分血の通つた温度があった。

「じゃあ、またな」

「はい」

フードは踵を返し、飛ぶよつた勢いでホールの階段を駆け上がつていった。

昔は何も考えていなかつた。考へることとは許されていなかつたし、事実、考えようとすることもなかつた。ただの一個の朝倉の兵器、命令に従い、目の前の敵を排除するだけだつた。そうでなければ「餌」は与えられなかつた。だが、今は多くの手によつて支えられて、一人の人として生まれ変わつた。与えられた理由の為に戦う必要はないが、己の考へで戦うことができる。たとえそれが誤つていたとしても、受け入れるだけの覚悟はある。

確かに、東京には新しい思想が必要なのかもしれない。だが、もし、ゝ狂宴ゝの言つ「平等」な美しい世界が本当に正しくても、自分がそうでないと信じる限りは戦える。自分にとつて正しいのは、自分の為に手を差し伸べる大切な人達が、幸せに暮らす未来なのだ。

「……ルウィード、この世界にあなたはいない。でも」「レンダーはアレス・プレデーターのクリップを投げて、新しい弾倉を装填した。

「僕は、戦う」

そして、自動音声を発しながら現れたドローンに銃口を向け、引き金を引いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0269e/>

The Last Battle

2010年10月8日15時36分発行